

Title	私の略歴
Sub Title	Repères biographiques
Author	鵜崎, 明彦(Uzaki, Akihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学会
Publication year	2023
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.144 (2023. 2) ,p.155- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鵜崎明彦先生退職記念特集号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000144-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私の略歴

鵜 崎 明 彦

1957 年（昭和 32 年）11 月 23 日 広島市生まれ

学歴

1976 年（昭和 51 年）4 月 慶應義塾大学文学部入学

1980 年（昭和 55 年）3 月 同大学文学部フランス文学科卒業（文学士号）

1981 年（昭和 56 年）4 月 慶應義塾大学大学院文学研究科フランス文学専攻修士課程入学

1983 年（昭和 58 年）3 月 同課程修了（文学修士号）

1983 年（昭和 58 年）4 月 慶應義塾大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士課程入学

1986 年（昭和 61 年）3 月 同課程修了（単位取得により満期退学）

職歴（非常勤）

1984 年（昭和 59）年より，慶應義塾高等学校（1 年），東京立正女子短期大学（4 年），慶應義塾志木高等学校（1 年），東海大学（6 年），慶應義塾大学文学部（7 年），慶應義塾大学法学部（5 年），杏林大学社会科学部（4 年），慶應義塾外国語学校（1 年），東洋女子短期大学欧米文化学科（1 年）にて，フランス語非常勤講師として教鞭を執る。

職歴（専任）

1993 年（平成 5 年）4 月 慶應義塾大学法学部専任講師

2000 年（平成 12 年）4 月 慶應義塾大学法学部助教授

2006 年（平成 18 年）4 月 慶應義塾大学法学部教授

2023 年（令和 5 年）3 月 慶應義塾大学法学部を定年退職

留學歷：1997 年（平成 9 年）3 月～1999 年（平成 11 年）3 月，慶應義塾派遣留
学生としてパリ第三大学に留学。

以上

* * *

退職記念論文集を出していただける。過分のことで、恐縮すると同時に、皆さんに深く感謝いたします。

「私の略歴」の執筆依頼が来ることはもちろん分かっている、その時はどういう心境になっているんだろうと想像したこともあり、また同僚から「最後のセメスターを過ごすお気持ちはいかがなものですか？」などと質問をいただくこともあるのだが、現時点では、正直なところ何も変わらない。学期が始まってしまえば、最後まで現役の教員である。特にコロナ禍以来、マスク越しの授業で体力消耗が一段と激しくなり（単に歳のせいかも知れないが）、日々の仕事をこなすことで精一杯だ。要するに、過去を振り返っている余裕がないのだ。

考えてみれば、高校卒業後上京して以来、かれこれ五十年近く慶應で過ごしてきた。その間、学生から教員へと立場が変わりはしたが、同じ大学にずっといて、学生とは、また多くの同僚とも、先輩・後輩の間柄で、しかも異動はない。良くも悪しくも起伏の少ない、なだらかな日々を送ってきた。半世紀近くの間には、嬉しいことはもちろん、悔しいこと、悲しいこと、腹立たしいこと、分岐点や波風もあったはずだが、時の風化作用というか、角は丸くなり、今さら記憶をたどってみても、特筆すべきことはない気がしてくる。

これから、授業にどうにか終止符を打ったあとで、実感がじわじわと湧いてくるのかも知れない。だがそのことよりも、教員という重い荷を下ろし、諸々の雑務からも解放され、晴れて書生の身に戻る。大学入学時に夢見ていた、思うさま自分の研究に打ち込むことのできる生活が待っている。体力と気力と知力が続く限り。そのことを励みに、今を懸命に過ごしている。

以上、「私の略歴」にふさわしい一文とも思えぬが、よろしくご寛恕を請う次第である。